
天使憑き

夢籠真琴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使憑き

【Zコード】

N6437Z

【作者名】

夢籐真琴

【あらすじ】

男に天使が憑いた

序章で殺されてしまった彼

その彼を見る眼は！？

天使が憑いた彼が目にするものとは！？

天使と紅い服の者の正体とは！？

天使憑きの彼の世界が今始まる

序章

彼がその異変に気づいたのは
高校からの帰り道であった

何かが変だつた

いつもの帰り道

いつもの自宅への登り坂

「な・・・・！」

音が聴こえない

匂いがしない

視界ははつきりしない

いや見ているものがまるでテレビを通して
見ているような感覚

そして手足は自分の思いとは反対に
止まらない

歩き続ける

右から車が

急ブレーキをかけられる

しかし車は急に止まれない

体は宙を浮いて壁にぶつけられた

痛みを感じない

車から男の人が降りてくる

何か言つている

しかし聴こえない

口を見ていると

「だ・い・じ・ょ・う・ぶ・か」

大丈夫か？

いいや、大丈夫ではない

身体からは大量の血が

「ああ、死ぬのか

意外に早かったなあ」

意識が遠くなる

自分が悪いのにこの人に迷惑をかけてしまったな

薄していく意識の中

相手のことを考えている自分がおかしかった

毎日疲れてた

一眠りするか

彼は自分が死ぬのに未練を感じなかつた

そして眼をとじた

野次馬が集まつてゐるところを

遠くから見つめてゐる者がいた

それは閑静な住宅街とは遠く離れた

学校の屋上だつた

フェンス越しに見ていたが

やがて興味をなくしたのか

紅い服をひるがえして

校舎の中に帰つていつた

天使との出会い？

彼は目が覚めた
寝かされていた
助かったのか・・・?
そう思いながら天井を見上げてみると
病院にしては天井が高かつた
ここは何処だ?
そう考えながら
まず上半身をしていてみた
体が動く
その事を確認するとなんだか嬉しかった
体が自由ということはいいことだとしみじみ思つた
彼は立つて周りを見渡してみた
そこは驚くことこゝわゆる

神殿

と呼ばれる場所だとわかつた
神々しい感じがした
「やっぱり死んだのか」
そう思い見惚れないと
「うお！？」
後ろに女の子が立つていて
同級生ぐらいだろうか
顔立ちは整つており
一般には可愛いと言われるであろう
これが天使だらうか
そう考えた途端

「おめでと～」

いきなり少女（天使？）が声をかけてきた

「君は千万人の一の確率に抽選であたりました～～～

妙に嬉しそうな声でいきなり言われたので

頭がついてもいかなかつた

「何に？」

ごくごく普通な

そしてまともな

当然の疑問を天使にぶつけてみた

天使との出会い？

その疑問に彼女は絶望的な答えを返してきた
「君、宮西零君を生き返らすことにしてたよ～」

ここまでまだまともだつた

生き返らすことは絶望的ではない

問題はこのあとの彼女の言葉だ

「私が零君を殺したんだ～」

・・・聞き間違えか？

この子が僕を殺したのか

「だからって悲觀しないでね～私がもう一度
現世にしていてあげるから～」

殴り倒してもいいだろうか？

温厚な性格だと自負しているけど

そこまで勝手に殺されたくない

ついでに殺されてすぐに生き返りたくもない

「じゃあ一緒に現世に戻ろ～」

ちょっと待て

手を挙げてみる

「はい、宮西零君」

こいつは教師か

「君は誰？ここは何処？現世に戻るってどうやって
我ながら簡潔に3つに絞つて質問できた

その答えは

「え～と一つ目からいくね

私はドロシア ドロシーって呼んでね

2つ目はここはいわゆる天の国ね

3つ目は魔法で帰るわ

なるほど

つて納得できるか

「ああ、忘れてた 零」

いきなり呼び捨てですか・・・
「眼と鼻と耳 どれがいい?」

「じゃあ眼で」

何となく答えてしまった

「さすが零君 見込んだだけのことはあるわ」

意味を問おうとした途端

何かに吸い込まれていった

目が覚めた

ここは何処だ？

ベットの上？病院か？

夢を見ていたのだろうか？

それにしてははつきりしていた夢だつた

隣には生命維持装置だろうか？それらしき物が置いてあつた
体は動かせそのうので立つてみる
意外にも痛さを感じない
後遺症というものもないらしい
ありがたいことだと感じながら
ゆっくりと歩いてみた

大丈夫そうだ

ふと後ろに気配を感じて振り返る
するとそこには

あの天使がいた

「元気そうだね」

お前が殺したんだろ

ていうか夢じやなかつたのか

再びの絶望感

「顔がこわばつてるよ」

女だからつて手加減しなくてもいいよな
そもそもこいつ天使だし

「どう？再び下界に戻つてきた感想は？」

下界じゃなくて現世か　君達には

「夢じやなかつたのか・・・」

無駄とわかつていても言つてしまつた

「あまり時間がないから要点だけ言つよ

君、宮西零は28時間前に交通事故にあって意識がない重体になつてゐる

ここで君が目を覚ました

多少めんどくさいけど精密検査がある

それが終わつて退院したらまた来るよ

一度と来るな・・・

殴りかかろうとしたとたん

後ろの扉が開いた

「まあ目が覚めたの！？」

じつとしてないと駄目よ

今先生呼びますね

年配のベテランらしい看護師が声をかけてきた

そしてもう一言

「あら、窓が開いてるじゃない

あなたが開けたの？

ここは10階なのだから落ちたらあぶないから開けては駄

目よ

・・・言葉がない

天使なら魔法で帰れよ

そうつぶやいた彼には絶望感しかなかつた

天使が帰つてから零は忙しかつた
別に精密検査はいい
医者の仕事だしやるしかないだろう
親もきて色々言われたがしようがない
自分が悪い
自業自得だ
いや、そもそもあの天使が僕を殺したのならあいつが悪い
また一つ彼女を殴る理由ができた
しかしこまだここまで良かつた
ここからが問題だつた
医者と警察から事情聴取をやらされた
ここまではまだ許せる
しかしこのあと聞かれたことは
「君はなぜ自殺をしようとしたのだい？」
驚愕的だつた
その言葉はあの忌々しい天使並みに
零を絶望の底に落とした
病室で窓を開けていたのと
フラフラと歩いていたのを
僕が自殺をするのではないかと疑つていたのだ
カウンセラーの人も来たし
カウンセリングもさせられた
ベットに10日間も座らせられて
常に誰かの監視があつた
これにはさすがに閉口した
ふと学校のことを思い出してみた
そういうや結構学校に行つていらないな
と思つた瞬間

「・・・もう、夏休みか」

宿題はどうするんだ

悶々と自問自答していた

それを見た監視の人が医者を呼んで来て

またカウンセリングを受ける羽目になった

「もうどうにでもなれ」

開き直った零だった

零が解放されたのは夏休みが半分ほど過ぎた頃だった

とうとう警察も医者も零の態度をみて

諦めたようだつた

カウンセリングも零が自暴自棄になつたので
変な結果になつてゐるだう

零が解放されて家に帰つて自分の部屋に入ると眼の前に忌々しい天
使が椅子に座つていた

「おかえり～お疲れ様」

零は天使に向かつて飛びかかつた

もちろん手はグーで

「ちょっと、なにするのよ 女の子に攻撃するなんて」

「てめえは天使だろ」

問答無用で殴りかかると

いや、かかろうとする

天使が消えた

「無駄よ あなたが私を攻撃することはできないわ」

眼の前にまた天使が立つていた

するとあきれたよう

「もしかしてあなた気づいてないの？」

「何を？」

諦められず隙あれば攻撃しようとしたまま問いかける

「あなたの鏡見ないの？見なさいよ」

何かいやな予感がした

急いで机の上にあつた鏡で顔を見てみると

「つお！？」

眼が白銀というのだろうか

光沢のある何色にも染まらないような
綺麗な銀色になっていた

「もしかして・・・」

身に覚えなら山ほどある

天界から帰る時に天使に聞かれた言葉

「眼か鼻か耳かどれがいい?」

あれが原因か・・・

げんなりとしている

「あなた本当に気づかなかつたの?」

前に会つたとき真夜中で電気がついていなかつたのに顔見

えたでしょ?

それはあなたの白銀の眼のおかげよ

ちなみにそれも私のおかげだから感謝してよね

折角さつきまで抑えてきた殺氣が再び燃える

「何をしたーーー天使」

再び殴りかかつた

天使の事情？

零の不意打ちによつていい勝負が出来た

―― 40分後――――――――――――――

人間の域を超えた体力を持つ零が体力がなくなり諦めたとき

「あなた、人間じゃないわね」

「大体お前も天使だろうが」

「あなたねえ いい加減私を名前で呼びなさい

よ 私はドロシア、ドロシーでいいって言つてるでしょ？ なんで

天使なの？」

「忘れてた」

ドロシーは肩を落とした

天使といえど疲れを感じるようだ

「聞きたいことがあるけどいいか？」

零は疑問に思つていたことを聞いた

「なんで俺を殺したんだ？」

「ここから始まる天使」^{ドロシー}の解説に零も肩を落とした

「天界にはたまに下界（現世）に必要がある時があるのよ
そこであなた達みたいな人間離れしている

オバケに用を頼むのよ

もちろんただ働きではないわよ 報酬はてるわ

でもいくら人間離れしたオバケでもできることとできないことがあるわ

そこであなた達には

白銀

の称号を与えるのよ

白銀の称号を与えるとその部分あなたの場合は眼 そこが天使

との同調するようになる

同調するとあなたの最大限の力が發揮できるようになるわ
あなた達を補佐する役割及び天界からの伝言を伝えるのが私たち天
使なのよ
わかつた?』

天使の事情？

「理由はわかった 具体的な天界からの要件はどんなのなんだ？」

「そうね、基本的にあまり難しいのはないわよ 安心してね」

「いやお前に殺された時点で安心とかいえないと思うが・・・」

「もう一つ、白銀の眼はどういうことができるんだ？」

「そうね～例えば壁の向こう側の人間の行動がわかるとか、遠くのものが見えるとか、危険時のみれけどものがゆっくり動いているよう見えるとか あくまでも危険時のみだけね 後は物に毒が入っているとか その物の材質がなになのかとか」

「なるほど結構高性能なんだな ちなみに同調を詳しくおしえてくれ」

「あなた、こんなこと聞いても驚かないのね
神経がないんじゃない？」

「お前に殺されて生き帰った時点で神経もへったくれもない」

「にべもない言い方ねえ 同調はね～あなたが危険になった時に

私にわかるとか

あと下界では携帯つていうの？」

あれと同じように通信ができるわよ

あなたの見ている世界は私にもわかる

文字通りあなたと私をつなぐのよ」

「おまえさつき難しくないって言つたよな？」

わっさから

—————危険—————

つていう単語連発してないか？」

「そ、そんなことはないわよ

こいつ一瞬焦つたな

天使の事情？

「おまえ、今『まかしたな』
「何のこと？」
「もう一発殴るうか？」
「わかつた言うよ言います」
「それでいい」
「あんたすごい偉そうね」
「時と場合による」
ため息をついたドロシーは説明し始めた
「確かに基本的には危険はないわよ
でもね前にあつたことなんだけど
通り魔事件があつたのよ
それで理由は言えないけど天界のお偉い方が
その犯人を捕まえるように白銀の称号を持つている人に頼んだのよ
でもその犯人がとても強くて
本来私たちに白銀の称号をもらう域の人だつたから苦戦したわけ
結局、その人の相棒の天使がきて助かったのよ
これでよろ
しいでしょうか？零様？」
「ああ、下がつて良いぞ」
「御意」

いつのまにか王と臣下の対談になつて
いた

「それで、俺はどうやって暮らすんだ？」
「今まで通りでいいわよ
あなたたちは特に口頃はすることはないわ
だからいつも通り学校に行つて
帰つて来るだけでいいわ
特にすることがないわけか
それなら滅多に呼び出されることもなさそうだ

「 しょうがない、選ばれたんだから付き合つてやるよ
ドロシーはホッとした顔で爆弾を投げつけた
「 これから私はここに住むわね」

天使と同居！？

零は妹との二人ぐらしだ
別に両親は他界したとかではなくちゃんと生きている
前に入院した時もちゃんと見舞いにきた
しかし父が外国中を飛び回っているので
それに付き添う形で母も一緒に飛び回つて
結果妹との二人ぐらしになつている

父は典型的な仕事人間で

滅多　ていうか2年はあつていい
だがそのおかげで妹と二人で生きていいけるだけのお金も貯つていて
それを知つていた天使は同居しようと言つたらしく
「何でよくいいじゃない同居ぐらい　」つちだつて泊まるとお金が
いるんだよ

部屋も多いし広いし問題なしでしょ」

「妹がいるだろうが」

「妹さんには見つからないようにするから」

「お前は信用できん」

「やだ／＼なにそれ　仮にも私たちは同調できる相棒なのよ　仲良く
しましようよ」

「気持ち悪い言い方するな」

「こんな美人を捕まえていてあなたは何を言つてるのよ？」

「自分で言つな」

「でも美人でしょ？」

「う・・・」

確かに美人だろ？

顔立ちは整つていて

しかしこいつは天使だ

人を殺しておいて同居しようなんてよくそんな口がたたける

一階から上がつてくる妹が見えた

もちろんドアは閉じている

白銀の眼を使って見ているのだ

「おい、天使隠れろ」

天使は妹が来たのをわかっているにもかかわらず隠れようとしない

「天使！」

声をあげたが動く気配がない

「私はドロシーよ」

な——

「兄貴、入るよ」

天使と同居！？？

渚（俺の妹）が部屋に入つてきて見たのは当然のように俺と綺麗な天使だった

しかし、この殊はどんでも黒い」と笑

「呪讀、二の眼の眼鏡つけて二つ」

「な——」

なぜこの眼が見えるんだ

ゼロシーに聞こ詰める

「おい、天使。なんでこいつが俺の眼が見えるんだよ？」一般人

するところでも最近恒例になつて、だいぶ慣れてきたはずの問題発

言をしてきた

「はあ？」

「だから彼女はこっち側の人間アカ」

がわいそうなことに零の影響が知らないけど彼女は私たちと組めるだけの実力を持つていてる

顎が落ちそうだった

「どういひ、波又は、このおやじ

あなたたちみたいなオバケを助ける役割があるのよ

白銀の称号を持つてはいないのだけど

あなたは・・・剣を使えるわね?「

これに答えたのは予想外の展開にもついてきている渚だった
「私は渚です はい剣道をやっています

綺麗な天使さん？」

「ドロシア、ドロシーでいいわよ

零の妹だけあつてさすがにすごい神経してるわね
普通の人はこんな時驚いてめんどくさいのに
さすがこの兄にしてこの妹ね」

「私は普通の人間ではない力はあることを知っていました
だから剣道をしました

兄貴に天使さんがついても

特に驚きません」

「ねえ 突然話変わるけどこの家に同居させてもうえないかしら
？渚」

「いいですよ、ドロシーさんみたいな綺麗な人・・・じゃない天使
さんは大歓迎です

兄貴女性に感心示しませんから」

女二人（天使一人か？）で盛り上がりしている
ドロシーは嫣然と笑いながら

「わかつたわ 任せなさい」

零は匙を投げた

天井どころではなく

宇宙に届くまでの勢いで投げつけた

天使と同居！？

結局、2人の説得（強引な）に負けて
ドロシーは同居することになった
2階は現在僕と妹が使っていたが
まだまだ部屋が余っていたので

その部屋の一つを提供する事になった
僕は押入れか物置にでも

放り込んでやろうかと思っていたのだが

渚の猛反対と

天使の女性をそんな所に放り込んでおくなんて（だからお前は天使
だろ）と主張し

2階の隅の部屋がドロシーの部屋になった

この際だからお前は女性なのかと聞いてみると

「もちろん、この体をみて女性に見えないなら眼科と神経科に放り
込むわよ」

「なんでそこに神経科が出てくるんだよ・・・」

案の定厳しい返事が

「あなたの神経がくるつてるからに決まってるじゃない」

「お前、さつきの事に根に持つてるな・・・」

「あたりまえでしょ

私は神聖な天使よ

その神聖な天使を物置に放り込むなんて

ひどい・・・」

泣く真似をし始めた

そこにどこから出てきたのか渚が

「兄貴、サイテー

女性を泣かせるなんてサイテーよ」

最近はすっかりこいつまで天使の味方になつて

こっちを一人がかりで攻撃してくる

天使一体と人間に

一般人である自分がかなうわけもなく・・・

いや、今更自分を一般人呼ぼうとするつもりはないが

勝てるはずがない

天使と同居？

天使と同居してはや一週間がたつ
幸い学校もまだ始まつていいので
家でのんびりとすることができた
これは事故（天使が殺した）のよつて宿題がほとんどないからだ
初めて天使に感謝できることが見つかった
それにしても、天使と同居したのに
特に変わることがない

我ながら、環境適応能力が発達しておると思う
僕は無神論者だが（すでに天使に会つた時点で神様はいるんだなあ
）と思ったが）神様にこれまた初めて感謝をした
その理由は妹に僕の血は流れていないことだ
初めは同居を進めていたのに、いざ始まるとなると気になつて仕方
がないようだ

それはそれとして
閑話休題

僕が天使と会つて劇的に変わつたのは
もちろん、白銀の眼だ

しかし、この眼ははじめは厄介な代物だつた
なにしろ入つてくる情報量が半端じゃない
何かを見るだけでその材質、質量などが一発でわかるからだ
ちなみに眼は両眼とも白銀の色をしているが
情報が入つてくるのは、右眼だけだ
両眼に入つてきたら、どうしようも無い
ついでに視野も広くつたようだ

ようだ、ではなくて確實に広くなつた
極端な話360。見えるようになつた

しかし慣れてくると面白いもので
周りにぶつかる危険性がない

それに結構面白い

天使曰く、

「あなたほど早く白銀の称号を慣れて
いつのまにか遊んでいるような人オバケはいないはずよ」
と呆れていた

天使の実態

天使が好きで嫌いなものは一体何だろうか？

これはもちろん天使に仕返しするためだ

退院して家に帰るより先に

そのために町外れにある図書館に行つてみた
町には大きな図書館がもちろんある

しかしながらなぜわざわざ町外れにある

図書館に行つた訳は

そこはおそらく個人経営でお婆ちゃんが一人だけでやっていたのだ
そのお婆ちゃんが魔女のように見えたからだ
天使もいるのだから、魔女もいるだろうと

強引な考え方をして

失礼を百も承知で体を透視
スキヤン

させてもらつたが一般人だつた

そのお婆ちゃんとは結構親しかつたので

安心をした

ところで、天使が好きなものはわかつた

ある日の夜

天使が居間に降りてきた

それを白銀の眼アイ

感じ取つた僕は

渚を置いたまま隣の部屋に避難する

それをみた渚も人間離れした脚力で同じように逃げた（渚は白銀の
眼を知つている）

しかし間一髪のところで天使は渚を見つけた

「あら、渚ちゃんどこいくのかなあ～？」

猫なで声というのだろうか？

物凄い甘い声で背中に鳥肌が立つような声だった

「あ、ああ、ドロシーさん こっちには兄貴もいますよ
密告しやがった

いやこの場合密告ではないが

「てめえ兄を売りやがったな

「だつて～」

「じゃあ2人でしましちゃうよ～」

前にもまして甘い声

体が震える

渚も同じく・・・

天使が盛んに（半強引的に）誘っているのは
市販のテレビゲームだった

数日前に話を戻す

「ねえ これ何なの？」

「テレビゲーム 天界にはゲームはないのか？」

「へえ～ゲームする機械なの

天界にはないわね

人間もたまにはいいのを作るのね

「テレビゲームに興味を示したので

渚が使い方を教えると

すごくはまつてしまつたのだ

徹夜で付き合わされたこともある

話を現代に戻す

戦慄した僕ら兄妹にゲーム機を渡して
早速始めてしまった

「俺は宿題があるから」

「あなた、宿題ないでしょ」

「う・・・」

「私は片付けがありますので・・・」

「あら、何のこと?」

キッチンを見てみると何時の間にか片付いている
魔法を使いやがった

「う・・・」

絶句した兄妹を横目で見ながら

「今日はなにしようか?」

これまた可愛い声で言った

家にはなかつたはずのゲームが積み上げられている
魔法で取り寄せたゲームを物色しだした

（～誰か天使が嫌いな物を教えてくれ～）

非日常の始まり

天使に無理矢理ゲームに付き合わされた夏休みは終わり新学期が始まつた

僕&渚はゲームから開放される喜び半分と新学期が始まる憂鬱感があつた

夏休みあけ特有のダラダラ感もあつた
そんなんある日、

数学の授業中に通信^{テレパシー}が入つた

もちろん相手は麗しき（面倒な）天使だ

通信は頭で考えたことが相手に伝わる

初めは慣れなかつたが最近は色々と便利に使つてている

「零、至急屋上へきて」

もちろん声は周りには聞こえない
時計を見てみる

あと30分は授業だ

「この時間が終わつてからでいいか？」

ところが無情にも天使は

「あなた、至急の意味がわからないの？早くきて」

声が珍しく切羽詰まつていたので

「わかった、今からそつちに向かう」

「急いでね」

「ほいよ」

さて、返事をしたのはいいが

この状態をどうやって脱出するのか

ちょっと考えてから

「先生、ちょっと用事思い出したので出でます」

教師と同級生がポカソンとしているところを

そのまま有無を言わさず廊下に向かいダッシュで階段を駆け上がつた

声に緊迫感があつた

それと共に零は不吉な予感をしていた

第六感というのだろうか

こういう感覺を無視するところがない

一応屋上を眼を使って見てみると特に以上は感じられない

一気に駆け上がりドアの前に立つた

そして、ドアを開けてみると

そこには、3人がいた

同級生くらいの男と

ドロシーは可愛い顔だが

その天使は（おそらく）、端整な顔立ちをしていた

もちろんもう一人はドロシーだ

白銀の眼には映らなかつた人が（天使？）いた

その様子を山の頂上から見ていた者がいた
決して近くはないその山の頂上で
静かに学校を見ていた
紅い眼を光らせて・・・

非日常の始まり（後書き）

新シリーズ突入

紅い人がついに出てきました
あとコメント、感想お待ちしております
それと天使の苦手な物も教えてください
小説に乗るかもしれません
是非コメント寄せてください

非日常の始まり？

天使に呼ばれて屋上にきた零が見たのは
透視^{スキャン}で映らないはずのない

2人の姿だった

いやよく見てみると耳が銀色にひかっている
白銀の称号だ

「なるほど・・・」

口の中が乾いている

絞り出すような声が出た

男の方は真面目そうな人間だ

天使の方は冷たそうにさえ感じられる

「零です、よろしく」

少しだけだが2人の表情が変わったような気がした

「よろしく中森秋人だ

ちなみに君より一年上だ」

「よろしくサミだ」

素つ気なく言われた

いやそんな気がしてたけど

「あなた、相変わらず強心臓というのか

鈍感というのか

慌てないで自分から名乗り出るなんて

とドロシー

「だから、お前に殺された時点で常識は捨てたよ

「ひどいわね」

「どつちがだ、人のことをオバケだ 鈍感だ言つてゐくせに」

「事実でしょ

「さすがだ・・・」

サミが俺たちの喧嘩になりそうな空気に入ってきた

高貴な声というのか

これが神様だといわれたならば
何も疑いを抱かなそうだ

「ドロシーが手を焼いているというからジのようないふな人間かと思つて
いたが

さすがだな

零か

名を覚えておこう

秋人さんも

「面白いやつだな

楽しめそうだ」

物騒な笑いをしながら言つた

一応一般人を自負している（天使に対しては言葉が荒いが）零はため息をついた

どうやら彼以外まともな人間ではなさそうだ

零は気づいていないが彼自身も他からみると相当変わつてゐるが・・

・

どうやら自分は彼らと協力をしないといけないらしい

早くも人生を悟つた零であつた

暗闇の中で紅い眼を光らせて
楽しげに笑つていた

「面白いやつだ」

口述との繋がり（前書き）

今回ばかりはと詮めです
少し間隔があいてしまいました
すみません――

口常との戻れ

二人に協力することが決定事項になってしまった零はげんなりと肩をおとしていた

それに構わず固いイメージを持っていた秋人とドロシーが仲良くしやべっていた

「それにして、こいつなかなかの器持つているな～」

「サミも認めたからね」

「あのサミが認めるのは滅多にない・・・いや見たことないもんな

「確かにね」

そこに乱入してきたサミが

「秋人は最初なにも言えなかつたからな

「いやいやサミさん、まずあの状況でまともな状態でいられませんよ」

なぜ敬語？

「零は割とまともだつたよね
軽口たたいてたし」

いや、よく覚えていないが

「そうなの　お前やるねえ

後輩なのに若干尊敬

これから俺に対しては敬語いらないよ

「ありがとうござります」

意外に軽い人なのか？

そんなことよりも聞かなくてはいけないことがあった

「ちなみに俺つて何で呼ばれたの？」

「紹介するためだけ」

「お前もしかしてそれだけとか言わないよな

ドロシーちゃん？」

満面の笑顔で問いかける

秋人、ドロシー、サミでさえ顔がこわばっている

「そのために授業を抜け出さなければいけなかつたわけはないよな

ヨーロッパ

今度は若干声が低くなる

ドロシーは顔が蒼くなつている

「ゼロ」

大声で叫び攻撃にする

トロジーも承知のうえで先に逃げている
二の空校は勉強二刀をハサハサ

授業を大切にしている

授業を抜け出すなんて言語道断だ

補習の嵐が待つてゐる

ていた

驚異的な跳躍力でドロシーに迫り、
次生を武器一いつ擲の体ごこちあり

それをみたか//は

「ドロシーがオバケと言つた理由がわかるな

身体能力が半端でにはなし

この黒板は物語の壁紙

あいつは本当の人間じゃないか先しれないな

零が「ジニ」を思つたのである。

「これだけ見てれば美男子と美女

楽しい画なのにねえ サ///やん

お前に何を期待している?

「何でもないです

そういうや何で魔法使わないとんたう?

魔法を使つたら零はかなわないはずでしょ?」

その疑問には零も耳を傾けた

「それは無理

天使と同調した人は天使の魔法にはかからない

「かかるつて・・・媚薬みたいじやん

じゃあ攻撃の仕方は?」

「無論殴り合い」

「原始的な方法ですね

ちなみに天使は疲れたり、傷ついたりするんですか?」

「一応するが人間程体力消費は早くない」

「なるほど」

2人和やか(?)に話しているのを聞き

「いい事聞いたなあ～ドロシーさん?」

秋人もサミも零の周りの気温が下がった気がした
いつのまにか零はドロシーに馬乗り状態になつていて

「ちょ、零　　女の子を殴つてはダメよ

サミさんも余計なことを言つてないで助けてくださいよ～

「お前は女か!」

「そうよ、私はか弱い女の子よ!」

「か弱いは取り消せ!」

秋人&サミは内心

そこか　　と突っ込んでいた

「あなた一回眼科行きなさいって言つてるでしょ

それと押し倒すのは他の女の子にしなさい

「お前以外にやつたら犯罪者じゃねえか

眼科も行つた

この白銀の眼でも問題なしだとよ

「それなら神経外科は?」

馬乗りの体勢で猛烈な口喧嘩をしているところに口を挟んできたの

は秋人だつた

「お一人さん 仲がいいのはいいんですが

そろそろ今の状況を考えてくださいよ」

零とドロシーに睨まれて逃げ腰になつた秋人だが逃げなかつた
今の一人に睨まれて逃げなかつたのは

表彰ものだ

顔を引きつらせながらも

「今授業中ですよ

周りの迷惑を考えてくださいよ」

『忘れてた』

秋人は妙なところでハモつた2人を見て

苦笑をしていた

そして白銀の耳を使って教師が上がってきたのを探知した秋人を先
頭に各自校舎を逃げ回つた4人であつた

番外編～逃走中～秋人&サミの場合

秋人が聞こえた通りちょうど屋上から降りたところに教師たちがきた
幸い顔は逆を向いていたので見られてなかつたが追いかけてきたの
で当然のように逃げた

秋人の場合

「何で俺まで逃げなきゃいけないんだよ～」

「あなたが原因でしきうが

あんな大声出して」

「元はといえばお前だろ」

「こいつら逃げてる最中まで喧嘩してやがる

俺はもちろんこの学校の生徒ではないので制服が微妙に違う
一応学生の中だから目立ちにくいだろうと思いつ制服をきてきた
ちなみに授業中に忍び込んだので生徒や教師には見つからなかつた

「おー一人さん、今は逃走中ですよ

いいかげん喧嘩はやめなさい」

とは言つたもののこの2人は見ていておもしろい
今まで見たことのない2人だ

大物だらうな

結構俺は真面目にとられることが多いが

面白いことが好きだ

特にこんなふうに校舎で鬼ごっこも嫌いではない

「ここから別れて逃げよう」

階段と廊下が多数あるところで

零の言った通り分散して逃げる
それぞれが別れて逃げた

とりあえず階段を降りたが

降りた瞬間に横から教師が出てきた
内心うんざりしながら逃げる

しかし行くとこ行くとこに出てくる

なにしてるんだ
ここはこの学校の教師は授業中に
なに暇なのか

そんな悪態をつきつつ一階に急ぐ

しかしそく考えてみれば授業中でも他の学校の生徒が乱入したら捕まえに行くのは普通か

そんなどうでもいいことを考えながら逃げる、逃げる、逃げる
校舎の中の地図はさつきサミさんに通信してもらつたからわかるが
それにも、この学校は迷路か
広すぎるだろ

予想外の広さに戸惑いはあるが

とにかく逃げ切らなくてはいけない

一階についた途端窓を開けて外に飛び出る

この学校はフェンスも高いのでそこをよじ登るわけもいかない
残る手段としては校門から堂々と出る…だが…
それは流石にまずいよな

と思いつつ脱出の方法を考える

幸い今は追われてないので校舎裏に隠れて

相棒に連絡をつける

通信で自分の連絡先を伝えておく
「サミさん、どうしますかね？」

サミの場合

階段を上に上がる

「なんで私がこんなことを」

咳きながら追つてから逃げる

こんな茶番劇に付き合ふう気はさらさらないが
衆人環視の中で魔法を使うわけにはいかない
最悪の場合記憶をいじればいいのだが

それは魔法ではいけないことのトップであり
タブーでもある

それには人の記憶をいじるのは気持ちのいいものではない
人の記憶とはいうものもあれば嫌な物もある
記憶をいじるのはその中に入つて作業をしなくてはいけない
そんな気持ちの悪いものをしてたくない
というのがサミの本音である

基本そうだろうが・・・

それはともかく逃げるところに人が出でくる
そろそろ面倒臭くなつてきたところ

「サミさん、校舎裏で待機中、指示頼む」

どうやら自分の相棒は逃げ切れたようだ

それなら自分も行動のうつる

「邪魔する奴を排除するぞ」

「了解」校門で集合ね

こんな曖昧な表現でも察してくれる相棒に
密かに笑う

いい相棒に出会えたと思う

そして後ろからくる者を角を利用して足で蹴り飛ばす

端整な顔立ちで無表情のまま人の顔を蹴り飛ばす天使も大変画になる

目の保養に最適だ

しかしそんなこともお構いなしで一気に階段を駆け降りて
校門にいる相棒の元へ向かう
どうやら全員片付けたらしい
口から泡を吹いている

「サミさん、終わったよ~」

飄々といとも簡単そうに言つ

顔を晒さずに5人も倒すのは楽ではないだろうに
零も面白いが秋人も面白いと

密かに思った

顔には出さなかつたが

「上等だ」

「そういえばあいつら大丈夫ですかね~?」

「元々あの2人が原因だ

自業自得だ」

「相変わらず冷たいね~」

「冷たい・・・か

「帰るぞ」

「待つてくださいよ~」

その声を聞き流し学校を出た

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6437z/>

天使憑き

2012年1月5日19時46分発行